



芦屋駅(1954年撮影)

阪神電鉄が1905年4月12日、神戸(三宮)ー大阪(出入橋)間から鉄道営業を開始して以来、今年で120周年を迎える。芦屋市には開業時から駅が設置され、文化の薫り高い、住宅都市のまちづくりの礎となった。同電鉄との関わりや思い出について、作家小川洋子さんと芦屋市長の高島峻輔さんに聞いた。



阪神電気鉄道120周年

住宅都市醸成への礎に

第3回
(4回続きシリーズ)



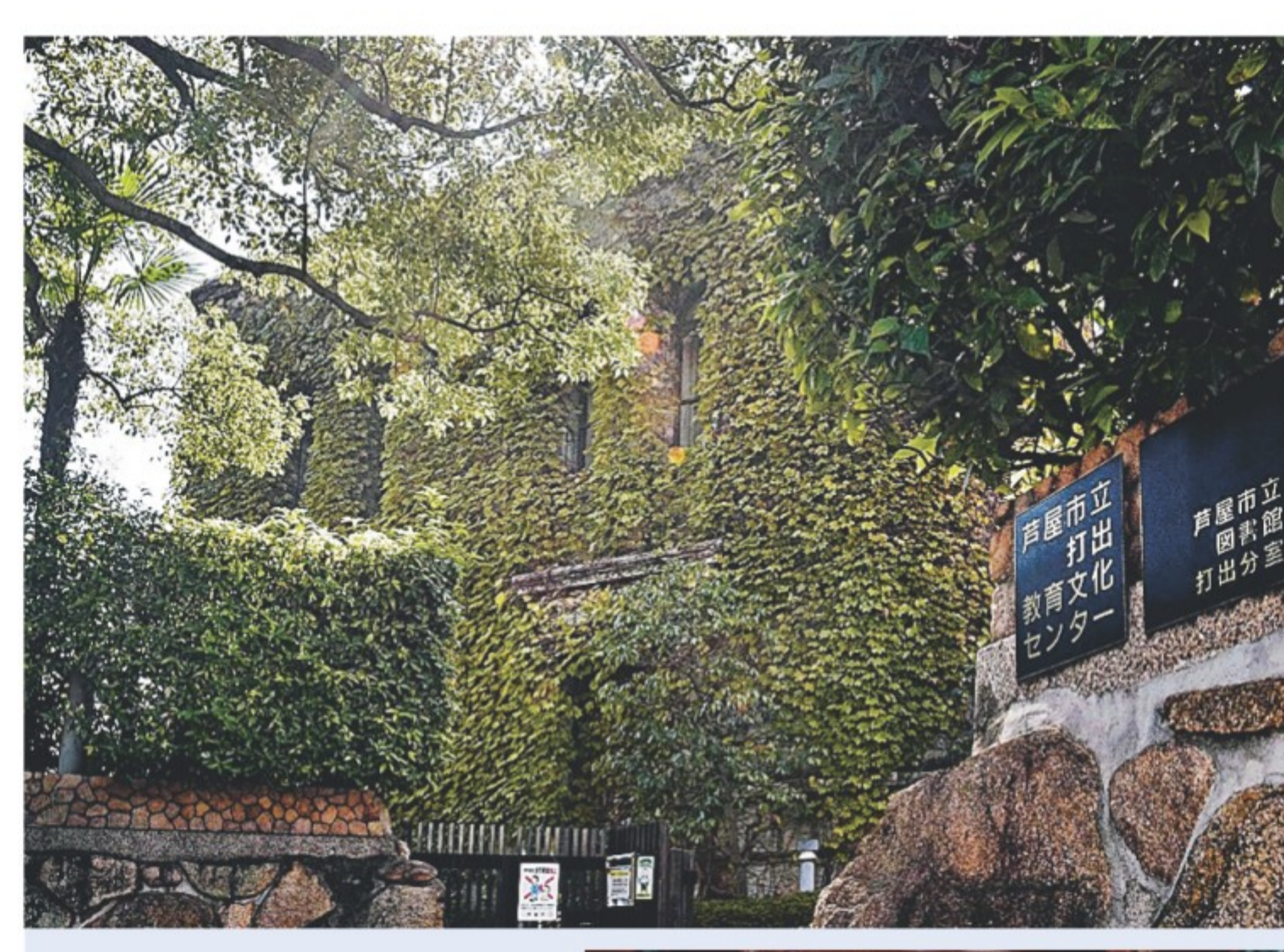
作家 小川 洋子 さん

「芦屋で暮らし始めた時に感じた街の印象は。岡山から大阪に転勤が決まった主人は中学、高校時代に隣の西宮に住んでおり、「いつか芦屋に住んでみたい」という夢をかなえるため家を探した。阪神間の海は世界に開かれた多くの文化を受け入れてきた。大阪の商人が住みつき、文学や美術、音楽などの薫り高い文化を育んだ。村上春樹ファンとしての私は、芦屋出身の村上文学の世界に踏み込めるとワクワクした。「風の歌を聴け」を読んだ時に感じた、温かい土着の雰囲気が、この場所から生まれたのかと思いつきながら街を散歩するのが楽しかった。

小説「ミナナの行進」は、芦屋の洋館で暮らす少女の物語。引越して程なく新聞連載の依頼があり、絶対この街を舞台に書こうと思った。しかも自分が一番多感な少女だった頃の昭和40年代を描きたかった。昔から住んでいる人に当時の様子を聞いたり、古い新聞や本を調べたりしながら



自然と文化 今後も大切に



想像を膨らませていった。日本にフランスパンを持ち込んだピゴさんのお店のことや製菓会社の社長の邸宅に小さな動物園があったことなどさまざまなエピソードと当時の出来事がつながって一つの世界が広がった。



孫は魚が好きで、芦屋川の河口を下った海で網を使ってカニやハゼを捕って遊んでいる。山側を奥池まで上がると鳥のさえずりが聞こえ、心が落ち着く。市立美術博物館には洋画家・小出楯重のアトリエが復元され、すぐ隣には谷崎潤一郎記念館がある。芦屋が育んだ文化をこれからも大切に守ってほしい。

「ミナナの行進」外国語版。左から中国語、韓国語、オランダ語、英語の各版

芦屋市 高島 峻輔 市長



「阪神電鉄と芦屋市の関わりは。芦屋市には全部で四つの鉄道駅があるが、阪神電鉄だけ2駅(芦屋駅、打出駅)。いずれも阪神本線開業と同時に開設され、芦屋市がその後、住宅都市として発展していく礎となっただけでなく、芦屋駅周辺には公共施設も整備された。芦屋市役所は真内でも駅に近い役所ではないかと自負している。近年、阪神電鉄の線路北側を東西に走る道路「鳴尾御影線」沿いからJR芦屋駅にかけた「ブランドینگエリア」ではおしゃれな店がどんどん誕生し、魅力



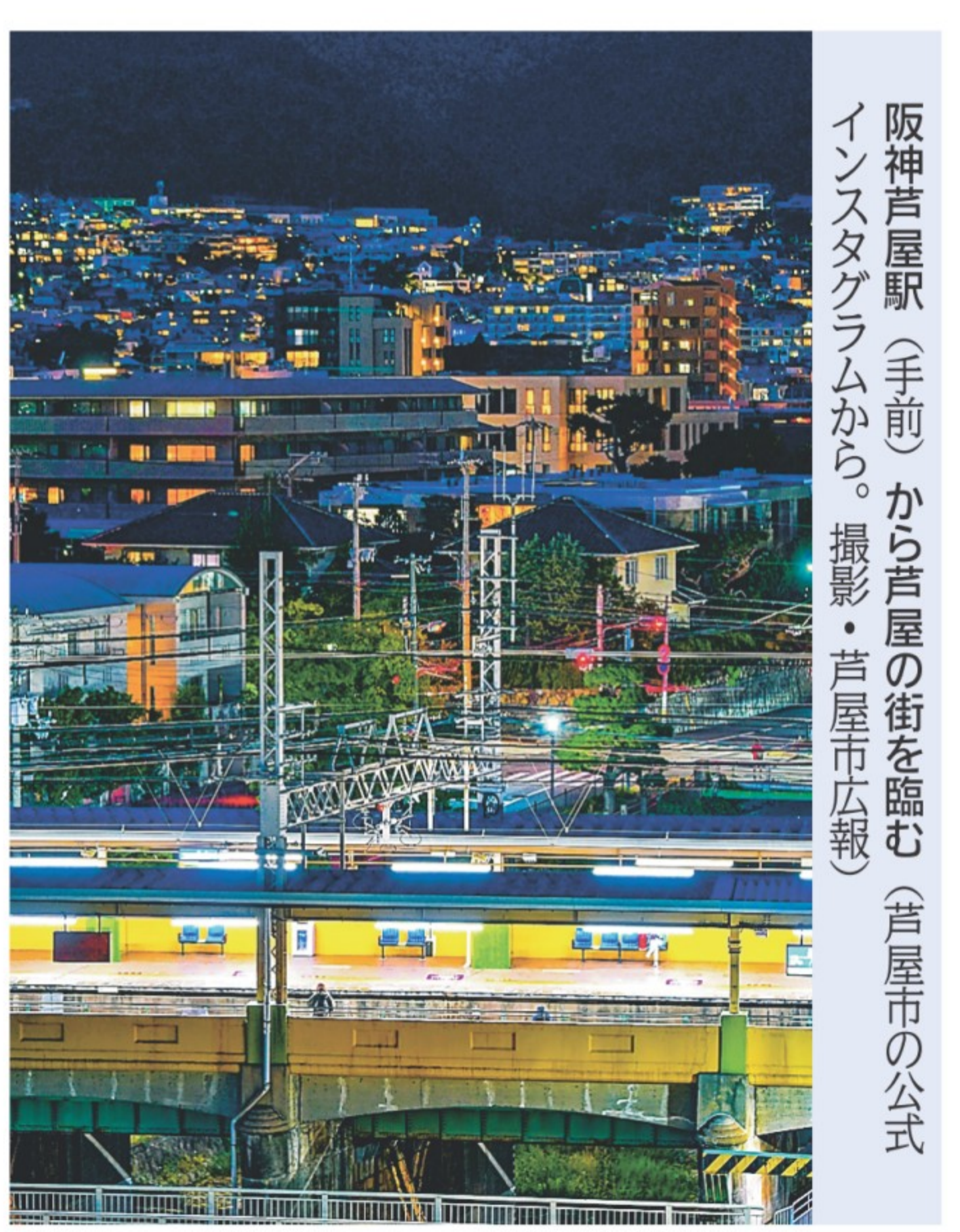
業平橋(国道芦屋川停留場) 1905年4月発行の「阪神電鉄」輸送委任の五十年」から

的なエリアになっている。阪神電鉄と連携したまちづくりについて。行政機関が集中する芦屋駅周辺は市中部の一つで、阪神電鉄との関係者や交差、日常的に親しんでいただけの歩きやすいエリアになるよう、まちづくりの議論も始めている。例えば周辺道路のリアフリー化もその一つ。また、阪神本線に九つ残っている踏切のうち七つが芦屋市にあることから、安全の確保などについても一緒に検討を進めていきたい。

線路周辺の安全共に検討

市民と対話し価値向上を

「エンカチ(沿線価値向上)」というキーワードでさまざまな取り組みを進めている。芦屋市も歩調を合わせ、山から海までが近く、神戸、大阪にもアクセスが良い環境を生かし、子育てがしやすい環境をさらに整え、市民との対話を踏まえながらまちの価値向上を図ってきたい。



優勝を決めた試合も球場で見たくも忘れられない。芦屋のご当地自慢を。私が一番好きなのは芦屋川だ。高い建物があるのに多くないことに加えて、市道においては全国市町村で無電柱化率が最も高いことから、空が広いことが特長だ。6月ごろに上流へさかのぼれば、ホテルも乱舞している。また、さまざまな景観を楽しむことができ、市民の皆さんもそれぞれ好きなスポットがあるようだ。私のお薦めは、芦屋川の上にある阪神芦屋駅からの眺め。山側には六甲山を背景にヨドコウ迎賓館が見える。これからの季節も見応えがある。阪神電車からの景観でいえば、踏切から西側を見た時にきれいな夕日が沈む景色は映える。ぜひ一度遊びに来てほしい。

阪神電鉄ダイアリー Hanshin



元町駅に停車中の特急(1936年3月18日撮影) 戦時体制の乗客数急増を受け、平日朝夕の混雑時に本線特急の6両連結運転を開始しました。軌道法に基づく6両連結運転は日本で初めて。戦後も他社に先駆けて急行運転を再開するなど、「みなさまの足 阪神電車」として先進性やあたたかさへの思いは今も変わりません。

1905~

エンタテインメント事業の第一歩は海水浴場

阪神グループでは、120年にわたり様々なエンタテインメント(娯楽施設)を提供してきました。最古は、鉄道開業と同じ1905年に開設した打出海水浴場。2年後に香櫨園海水浴場へと移転した後、1913年に廃止された香櫨園遊園地の音楽堂・公会堂を同所へ移設し、私下げを受けた西宮旧砲台跡地をビヤホールとして活用するなど、多くの海水浴客で賑わいました。現在まで続くエンタテインメント事業の先駆的な取り組みであったと言えます。

一大レジャータウン・甲子園

また戦前は、甲子園地区で一大スポーツ・レジャー施設を運営していました。1924年の甲子園大運動場(現・阪神甲子園球場)を皮切りに、陸上・ラグビー・サッカーの競技場として利用できた南運動場、最大で100面を超える規模に拡充されたテニスコートのほか、海水浴場、プール、ホテルなどが続々と開設されました。とりわけ、1929年開業の旧阪神パークは、動物園・遊園地・水族館など、様々な娯楽施設を備えた大規模レジャー施設でした。

旧阪神パーク(現甲子園阪神パーク・1929~43年)案内図

~2025 to the future

広がるHANSHINのENTERTAINMENT

平成以降も、音楽分野で、ビルボードライブ(東京・大阪・横浜)やビルボードクラシックなどのビルボード事業を全国展開しているほか、小学生からシニア世代まで音楽に親しめるミュージックスクールも開講しています。2024年にはインバウンド向け相模エンタテインメントショーホール「日楽座」を開業するなど、お客様とのつながりを「たいせつ」に、エンタテインメント事業の領域を拡大しています。

私たちが届けてきた「あたたかさ」とは120年ずっと、想いはひとつ

阪神「たいせつ」スポーツ

ビルボードライブ大阪

Hankyu Hanshin Toho Group

「たいせつ」がギュッと。 Hanshin Group

阪神電車が1905年に開業して120年。お客様の「たいせつ」に向き合い「阪神らしさ」を育んできました。つながりが生む「あたたかさ」。プロフェッショナルが生み出す「ほんまもん」。共感から生まれる「先進性」。お客様の「たいせつ」がギュッと。つまったモノやコトを生み出しお届けしていく。阪神グループの物語がここにあります。

詳しくはこちら

120th 阪神電気鉄道120周年

QRコード